

# 幼稚園「領域『言葉』」における伝承物語の位置

— 物語指導の根幹となるものとして —

## Position of Folklore in Kindergarten “Language” As the Basis of Teaching Methods of Stories

光野公司郎 (共栄大学)・國府田祐子 (松本大学)  
Koshiro KONO・Yuko KODA

### 概要

物語指導の課題としては、伝承物語の読み聞かせが不足しているということが挙げられる。物語の読み聞かせは幼児に間接的な体験をさせることになる。そして、そのことは幼児を自立に導くことにつながっていく。特に伝承物語の読み聞かせは、人間の普遍的無意識に関する体験をさせてくれる。そしてそのことは幼児を自立の初期段階に導くことにつながっていくのである。例えば、グリムの「ヘンゼルとグレーテル」は、母親の肯定的な側面と否定的な側面の両方が描かれている。この童話は母親の否定的な側面を把握して、それを克服することの大切さを教えてくれることになる。これは幼児を母親からの自立の初期段階に導くこととなるのである。本稿は、物語指導の根幹となる伝承物語の読み聞かせの在り方を提案していくものである。

キーワード：読み聞かせ、伝承物語、自立心、普遍的無意識、グリム童話、母親の否定的側面

### Abstract

As a problem of teaching methods of stories, there is a tendency to do the storytelling of folklore less. Storytelling provides an indirect experience for the children. And that will lead the children to self-reliance. In particular, storytelling of folklore gives the children an experience of the Collective Unconscious of human beings. And that will lead the children to initial stage of self-reliance. For example, the Grimm's folklore "Hansel and Gretel" shows that both positive and negative aspects of the mother. This folklore teaches the importance of understanding the negative aspects of the mother and overcoming them. That will lead the children to initial stage of self-reliance from the mother. In this paper, we will propose how to do the storytelling of folklore as the basis of teaching methods of stories.

**Keywords** : Storytelling, Folklore, Self-reliance, The Collective Unconscious, Grimm's folklore, Negative aspects of the mother

## 1. はじめに

幼稚園教育における伝承物語の読み聞かせについての問題点を明らかにし、伝承物語の読み聞かせが自立心の形成につながるという考え方にに基づき、研究の方針について述べる。

### 1.1 問題の所在

幼児たちに物語を語り聞かせをしたり、読み聞かせをしたりする重要性は社会全体に浸透している。だが

以前と比べると、幼児たちが童話や昔話などの伝承物語に接する機会は減っているようである。海老沢千冬らは、2000年に3歳児から5歳児を対象として童話・昔話の知識に関する調査を行い、1990年と比較し「童話・昔話が幼児たちにとって明らかに『遠い存在』になってきている」とまとめている。<sup>(1)</sup> また、幼稚園教諭・保育士約100人と、3歳児から5歳児をもつ保護者約150人に質問紙調査を行った小山祥子は、「昔話は家庭よりも幼稚園で触れられていると思っている保護者が半数近くいる一方で、園側では、昔話の分野の実施率は非常に低かった」と考察し、「保育の現場で意図的に語らなければ減少の一途にあるといっても過言ではない」<sup>(2)</sup>と危惧している。

社会構造や家庭環境の変化と合わせ、伝承物語にあまり触れずに成長していく幼児たちが増加している傾向が認められる。保育場面において意図的・計画的に伝承物語に触れさせる必要性は、今まで以上に高いとすることができる。

幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「(2)自立心」には、「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。」とある。本稿では、伝承物語の読み聞かせが幼児たちの自立心の形成につながるという考え方に基づき、伝承物語を読み聞かせる意義を提案する。

## 1.2 研究の目的

伝承物語が幼児の自立心の形成につながるという考え方に基づき、幼児教育で伝承物語を読み聞かせる意義について構想する。

## 1.3 研究の方法

- (1) 幼児期において依存から自立へ向かう時期に、幼稚園教育要領「言葉の獲得に関する領域『言葉』」における物語の教育がどのように寄与するか明らかにする。
- (2) 先行研究から、物語の中でも特に伝承物語に含まれる要素を考察し、伝承物語を読み聞かせる効果を明らかにする。
- (3) 幼児の自立心の形成にむけた伝承物語の教材および指導法を提案する。

## 2. 幼稚園教育要領と「自立心」の形成

この章では、幼児期の生活や、「人との関わりに関する領域『人間関係』」や「言葉の獲得に関する領域『言葉』」のねらいや内容を整理し、「自立心」の形成と物語を与えることとの関係を考察する。

### 2.1 幼稚園教育要領「幼児期の生活」

幼稚園教育要領解説「序章 第2節 幼児期の特性と幼稚園教育の役割 1 幼児期の特性 (1) 幼児期の生活」には、下記のようにある。<sup>(3)</sup>

幼児期には、幼児は家庭において親しい人間関係を軸にして営まれていた生活からより広い世界に目を向け始め、生活の場、他者との関係、興味や関心などが急激に広がり、依存から自立に向かう。

この時期は、大人への依存を基盤としつつ自立へ向かう時期であると言える。自立心を育むために、「人との関わりに関する領域『人間関係』」のねらいは次のようになっている。

〔他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。〕

(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。

(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、

愛情や信頼感をもつ。

(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。<sup>(4)</sup>

〔内容〕の「(4)いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。」<sup>(5)</sup>がある。ここでは幼児たちは、信頼する教師に温かく見守られ、適切な援助を受けながらあきらめずに遊びをやり遂げる姿を期待されている。このような体験を重ねることで、粘り強い気持ちを育んだり、見通しや自力解決の気持ちをもったりして、自立心や責任感が育っていく姿が求められている。

同じく〔内容〕の「(13)高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。」<sup>(6)</sup>がある。人間は孤立して生きているのではなく、周囲の人達と関わり支え合って生きていることを実感することが大切であり、そのために、地域の人々と積極的に関わる体験をもつことが重要とされている。具体的には、高齢者を招き行事を一緒に楽しんだり、昔の遊びを教わったり、昔話や高齢者の豊かな体験に基づく話を聞いたりし、施設を訪問し交流するなど、実際にふれあう活動を工夫することが重視されている。

このように、「人との関わりに関する領域『人間関係』」では、直接的な体験活動が多い。人や物と触れ合ったり、多様な人々と共に活動したりする場面を通して、幼児たちの依存から自立へ向かうための能力を養成する方針が示されている。

## 2.2 幼稚園教育要領「言葉の獲得に関する領域『言葉』」

一方、時間的にも空間的にも限界のある幼稚園における保育の中で、自立のための体験を十分にさせることはなかなか難しい現実がある。さらに、直接的な体験だけで自立心を育てていけるわけではないことも明らかである。

「言葉の獲得に関する領域『言葉』」のねらいは次のようになっている。

〔経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。〕

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。<sup>(7)</sup>

「言葉の獲得に関する領域『言葉』」には、「言葉で表現」したり、「伝え合」ったり、「感覚を豊かにし」たり、「心を通わせ」たりするねらいがある。ねらい「(3)絵本や物語などに親しむ」むには、特に絵本や物語を媒体とし、言語感覚を豊かにしたり、周囲の人との心の通じ合いを養ったりする目的が含まれている。

内容に、「(9)絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」がある。解説の概要は下記の通りである。<sup>(8)</sup>

- ①幼児は、絵本や物語などで見たり聞いたりした内容を自分の経験と結び付けながら、想像したり表現したりすることを楽しむ。
- ②幼稚園で教師や友達と一緒に聞いたり見たりするときには皆で同じ世界を共有する楽しさや心を通わせる一体感などが醸し出されることが多い。
- ③一方、家庭ではどちらかというと自分の興味のあることを中心に見たり読んだりすることになる。幼稚園では教師や友達の興味や関心にも応じていくので幅の広いものとなり、家庭ではなかなか触れない内容にも触れるようになっていく。
- ④現実には自分の生活している世界しか知らない幼児にとって、様々なことを想像する楽しみと出会うことになる。登場人物になりきることなどにより、自分の未知の世界に出会うことができ、想像上の世界に思いを巡らすこともできる。
- ⑤なぜ、どうしてという不思議さを感じたり、わくわく、ドキドキして驚いたり、感動したりする。また、

悲しみや悔しさなど様々な気持ちに触れ、他人の痛みや思いを知る機会ともなる。このように、幼児期においては、絵本や物語の世界に浸る体験が大切である。

絵本や物語は、想像する楽しさを味わったり、他人と同じ世界を共有したり、新しい世界を知って浸ったり、登場人物になりきったりする世界が広がっている。絵本や物語が幼児教育に果たす役割は非常に大きいことが確認できる。

### 2.3 物語の範囲

上記のように、「言葉の獲得に関する領域『言葉』」の〔内容〕では、「絵本や物語など」とひとくくりには扱われているが、物語はそれ自体が独立した一分野として存在しており、その範囲は広い。

物語の定義としては、「言葉を構造化し、連続性のある整然とした様式で出来事を語り伝えるようにしたもの。(中略) 物語は、語られる出来事と出来事との間の構造的な関係、出来事の時間的な流れ、物語の中に存在する時間の流れ、語り手の視点と調子、語り手と読者の関係、語りそのものの働きなどによって作り上げられる。」<sup>(9)</sup> や、「ものがたる、口誦文芸のこと。諸氏族によって伝承された語りごとであり、(中略) 題材としては、最初は神話・伝説のような事実そのものではなく、架空の事柄を扱ったものが多く、虚構である。」<sup>(10)</sup> や、「作者が見たり聞いたりしたことや想像したことを土台にして、ある人物や事件について筋道立てて書いた散文の文学作品」<sup>(11)</sup> 等とある。

このように、研究領域それぞれの切り口によって物語の定義の言葉は多様であり一つにまとめることはできない。そこで本稿では幼児たちが触れて浸る世界そのものに着目し、「表現上の特質」と「表現される内容の特質」に大別していく立場を取ることにする。幼児たちが直に触れる「内容面での特質」として、「表現される出来事は、現実的世界のことかどうかは問われ」ないとされている。その出来事には三つの場合があり、「現実的な世界の物語」「超現実的、空想的な世界の物語」「現実と超現実世界との交流する物語」という特色がある。<sup>(12)</sup> これを援用し、本稿では物語のことを、「筋道があり、内容は現実や超現実、空想などを含む」としていく。

人にとって、物語のような文学を読む(聞く)ということは、以下のような意義がある。<sup>(13)</sup>

文学を読むということは、言語による虚構世界を生きる行為である。私たちは、未だ知らない場(時・所)への好奇心から読み始める。おもしろさに惹かれて読んでいくうちに次第に人間の深いところが開かれていって、人生の味わいを深くする。その喜怒哀楽のプロセスと結果によって、心が癒され、人間認識のより高いより深い世界へと進み出ていく。そのとき私たちは、登場人物と共に生き、それまでの自己を何らかの意味で否定し新しい自己の成長を実感している。出会いによる衝撃は、劇的に人生観を覆すものであったり、静かに沈潜していった緩やかに自己再生を促していくものであったりする。

「言葉の獲得に関する領域『言葉』」の「(9)絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」に関して、幼稚園教育要領解説を詳しく見ていくと、「登場人物になりきることなどにより、自分の未知の世界に出会うことができ、想像上の世界に思いを巡らす」ということは、「未だ知らない場(時・所)への好奇心」を抱き、その「おもしろさ」を体験するということであると示されている。そして、「悲しみや悔しさなど様々な気持ちに触れ、他人の痛みや思いを知る」ということは、「人間認識のより高いより深い世界へと進み出ていく」ことである。さらに、「(物語の)内容を自分の経験と結び付けながら、想像したり、表現したりする」ということは、「それまでの自己を何らかの意味で否定し新しい自己の成長を実感している」ことにつながっていくとも示されている。<sup>(14)</sup>

教育基本法第一章第一条では教育の目的として「人格の完成」を掲げている。物語によるによって「新しい自己の成長を実感」することができたなら、それは大いに人格の完成に寄与することになる。

これは、自立心という観点からみても同様のことが言える。自立することに関して「新しい自己の成長を実感」することができたなら、それは発達の段階に即した自立心に深まっていったということになる。「触れ合う」などの直接的な体験ではなく、「虚構の世界」である物語を「想像する」という間接的な体験によっ

てそれはなされたことになる。

自立心は、ひとつの直接的な体験によって、または一冊の物語による間接的な体験によって急に完成されるのではない。人間の発達の段階に即してふさわしい完成の度合いがあり、それぞれの段階の積み重ねによって少しずつ高まり深まっていくものである。

### 3. 伝承物語の範囲

この章では物語を下位分類し、そのうちの伝承物語にみられる構造上の特色について、いくつかの理論を踏まえ、幼児たちに与える効果を考察する。

#### 3.1 創作物語と伝承物語

物語を発生的な見地から見ると、創作物語と伝承物語に大別することができる。『国語教育研究大辞典』の「物語教材」の項には、伝承物語は「昔話の再話などによって出来上がった伝承的な内容の物語」とあり、創作物語には「創作による個性的な物語」とある。同書の民話の項には、「庶民の間に伝えられていた口伝えの話。(民間説話) 英語の folktale。昔話・動物昔話・笑い話・形式譚が含まれる」とあり、伝承物語には「庶民の口伝えで語り伝えられた物語。昔話、民話。(folktale <英>、volksmärchen <独>、conte populaire <仏>)」作者のわかっている物語は創作物語と言い、伝承物語とは全く別の近代文学」とある。本稿では民話や昔話のことを「伝承物語」と統一して表記することとする。<sup>(15)</sup>

#### 3.2 市毛勝雄の基本形

市毛は、物語の基本形を「一人の主人公が登場し、一つの事件があって、その主人公が終わりにははっきり変わる。初め、中、終わりの三部構成」と構造化し、「初めと終わりの『変化』が物語の『主題』を体現している」<sup>(16)</sup>と述べている。そして、伝承物語の構造の特色を次のように述べている。

伝承物語の一つ一つは、一回だけ事件が起る。(中略)そして「変化」は常に、ハッピーエンドの形で終る。子どもにとっては、何が正しいか、何がわるいことかは、生きていく上で知らなければならない大問題である。<sup>(17)</sup>

さらに市毛は、伝承物語の「終わり」についてはハッピーエンドが重要だと述べている。そして三部構成における「中」と「終わり」の関係について、グリム童話を例に挙げながら次のように述べている。

『グリム童話』は平凡に暮している登場人物が、“危機”に陥り、それをどうやって切りぬけるか、という話が大部分である。(中略)この“危機”の状況が厳しく、苛酷であるほど、登場人物がそれを乗り越えた時の喜びは強い印象を聞き手に与える。「ああ、よかった。」この感情こそ、児童の生命感覚の原点である。そしてハッピーエンドに終わったその瞬間こそ、“危機”を脱する時の「知恵」(いろいろな知識や的確な判断力)が改めて思い返される。<sup>(18)</sup>

市毛によると、危機とその後のハッピーエンドは一つの対を成しており、それを乗り越えた時の喜びは子どもたちに強い印象を与えるということである。訪れる危機は苛酷であっても、「終わり」がハッピーエンドであることによって、子どもたちに安堵感や達成感を残すということである。この苛酷さが子どもたちにとって予想外であろうと、それが無意識に持ち合わせていた意識に触れていくことになれば、それらは幼児たちを深部で動かす力となる。したがって物語を最後まで聞き終わった瞬間に、幼児たちに危機と結末の融合体とし印象を残し、幼児たちの内部に強く働きかけると言えるのである。

#### 3.3 Max Lüthi の様式理論

Max Lüthi は、伝承物語には五つの様式理論「一次元性・平面性・抽象的様式・孤立性と普遍的融合の可

能性・純化と含世界性」があることを提唱した。<sup>(19)</sup> これらが重なり合ったものとして、伝承物語としての昔話の機能と意義について次のように述べている。

昔話は、ある非常に特別な意味においてのみ「願望の文学」である。昔話の意図は、原始的願望がなんの苦もなくみたされることをわれわれに示すことにあるのではない。(中略) 昔話の興味は、最後に獲得される宝物とか王国、妻などにあるのではなくて、冒険それ自身にある。兄などの非主人公だけが、金や銀の山を見つけると満足するのであって、主人公はそれによってさらに冒険へかりたてられる。昔話の主人公が贈物を受けとるのは、決定的課題を克服するためであって、永続的に快適に使用するためではない。昔話が図形的登場人物にあたえるのは、じつは物ではなくていろいろな可能性である。昔話は登場人物を、なにか行動しなければならないところへ導いていく。そしてその行動ができるようになったものにはさらに援助をあたえる。しかし、できるものにだけである。<sup>(20)</sup>

Lüthi は、伝承物語は日常的欲望ではなく、人間の深部にある願望を満たすと述べている。その願望を満たすためには、主人公は「なにか行動しなければなら」ず、行動が止まれば真の目的は達成されない。行動した主人公には次の援助が施され、だんだんとその目的を達成するというのである。つまり主人公は結末に向かって動かざるを得ない立場にある。動的な主人公が登場し、冒険をし、周囲からの支援を受けながら危機を乗り越えていくということである。

市毛の基本形に Lüthi の様式理論を重ねて構造化すると、次のように図式化することができる。

初め - 中心人物が生きる発達段階以前 (今まで生きてきた段階) のイメージ 静的な描かれ方

中 - これから生きていく発達段階にふさわしい経験 動的な描かれ方

終わり - 中心人物が生きる発達段階 (これから生きていく段階) にふさわしいイメージ

動的な行動による結果

伝承物語には、「危機の克服に伴うハッピーエンド」という自立心を育む構造があり、それは、「動的」な主人公によって実現される様態を有している。つまり伝承物語は幼児たちの自立心の促しに、内的に働きかける要素が含まれていると想定できる。

#### 4. 伝承物語が働きかける心理的側面

この章では、伝承物語が幼児たちの自立を促すとして、その自立を促す複数の要素や、自立する元について、心理学的な面から考察する。

##### 4.1 自立心と発達のプロセス

幼児たちに伝承物語を聞かせる効果について Bettelheim は、「我々は発達過程の途中でも、その時々心の理解力に応じて、少しずつ、生きることの意味を求め、見出していかなければならないのだ。」<sup>(21)</sup> と述べ、幼児たちにとって重要な点を三点述べている。

この問題に対して第一に重要なのは、両親など実際に子どもの世話をする立場の人々の影響である。

そのつぎに重要なのは、正しい方法で伝えられた文化的な遺産である。対象が小さな子どもである場合には、こういう情報源として最適なものは、文学である。<sup>(22)</sup>

このように、幼い時期の心の成長には物語のような文学による意図的・計画的な保育が重要であることを指摘している。

さらに Bettelheim は二点目として、伝承物語としての昔話について次のように述べている。

あらゆる児童文学の中で、子どもだけでなく大人にもいちばん実り多く、満足を得られるのは、いくつかの例外はあるものの、まず、人々に語り伝えられてきた昔話だろう。(中略) 子どもに理解できる物語の中で、昔話ほど、人間の内面的な問題について教え、社会の形態には関係なしに、困難な立場か

らぬけで解決法を示してくれるものは、ほかにない。<sup>(23)</sup>

Bettelheim は、ずばりと伝承物語の有効性を述べている。伝承物語には困難な立場から抜け出るための解決法が示されているという指摘である。

三点目として、伝承物語としての昔話について、Bettelheim は次のようにも論じている。

昔話は、健康な人間の発達のプロセスを、想像上の世界のこととして示す。そして、これからその第一歩を踏み出そうとしている子どもに、その発達がとてもすばらしいものだど印象づける。(中略) 昔話は、他のどんな種類の文学とも違って、子どもたちに、自分がなんであり、なにをすべきかということを見出すようにしむけ、その先、自分の人格を発展させるためにはどんな経験をしたらよいかを示す。

そして、人間はたとえ困難に出会っても、よい生活をかちとることができるものだど教える。<sup>(24)</sup>

自立心は、それぞれの発達の段階において少しずつ深まっていくものであるということを手で述べた。発達の段階に即した幼児の自立心の育成を考えた場合、その段階に適した伝承物語の読み聞かせを行うことの重要性が指摘できる。伝承物語には問題の提示と、問題を克服し解決する方法、そしてこの問題はみなを抱える普遍的な問題であることを伝える力があるということである。

#### 4.2 自立心をはぐくむ普遍的無意識への働きかけ

伝承物語は「人間の内面的な問題」について描かれており、その内面的な問題については河合隼雄が「(昔話は) 無意識の心的過程の表出」<sup>(25)</sup>と論じている。つまり、内面的な問題とは、自身では意識することはない「無意識」の問題であるということになる。

この「無意識」について、Jung は「個人的無意識と普遍的無意識」<sup>(26)</sup>に分けて考えることを提唱した。普遍的無意識とは、われわれの内面の深層は人類に共通の普遍性があるということである。

この普遍的無意識について表現されたものが伝承物語であると言える。放っておいたら人間が意識できないこと、しかもそれが人類に共通の普遍的なものであることに気づかせていくことは、人格の完成のためにも、当然、自立心の育成のためにも最も基盤となることであると言える。

このような幼稚園の時期において、「自立心」を育成していくことはとても重要なことである。この重要な自立心を育成していくにあたっては、まずそれを阻害する普遍的無意識について、幼児たちに認識させていく必要がある。

Bettelheim は、自立を阻む力には、例えば「母なるものの否定的側面」<sup>(27)</sup>があると論じている。この母なるものの否定的側面とはどのようなものなのであろうか。

河合隼雄は母親について「慈悲深く優しい母親像」と「恐ろしい魔女の姿をとるもの」<sup>(28)</sup>の両面性があると述べている。

母性はその根源において、死と生の両面性をもっている。つまり、産み育てる肯定的な面と、そのすべてを呑みこんで死に到らしめる否定的な面をもつのである。(中略) そして、その両面のうちの肯定的な面のみを母性の本質として、人間が承認しそれに基づく文化や社会を形成してきたのであるが、否定的側面は常に人間の無意識に存在して、われわれをおびやかすのである。<sup>(29)</sup>

自立心を阻害する普遍的無意識とは、すべてを呑みこんで死に至らしめるという、母なるものの否定的側面であると言える。

幼稚園の時期の生活については前述した通り、家庭（主に母親）から集団生活への適応の度合いを高めていくことが大切になってくる。この時期は、その適応の度合いが自立の度合いにつながって行くと言っても過言ではない。「産み育てる」という肯定的側面のみを信じ、否定的側面の認識がないままでは、家庭から集団へ適応していくことは困難である。すべてを許し抱擁してくれる母親のもとにいる方が快適であるし安心できるからである。

したがってこの時期の幼児たちには、母親の否定的側面を認識させていくことが重要である。そして、主体的に社会へ適応していかなければ、呑みこまれて死に至らされてしまうことに気付かせなければならない

のである。

河合は母親の否定的側面について描かれた伝承物語について次のように述べている。

母親のやさしさ、母親への孝養などが公認の倫理として設定されると、母性の否定的側面という現実  
は、その中に入れこむことがむずかしくなる。かくて、昔話はそのようにして棄てられた現実を、拾い  
あげ保存してゆく機能をもつことになる。それは公的な倫理を補償する民衆の知恵としての意味をもつ  
のである。<sup>(30)</sup>

現実の世界で母親から無理に幼児たちを引き離すのではなく、伝承物語の世界の中で母親の否定的側面を  
経験させ、無意識に働きかけ、集団生活への適応の度合いを進めることが可能である。幼稚園の時期におい  
て、自立心を育成していくためには、伝承物語の読み聞かせによる保育は、欠くことができないものである  
と言える。

## 5. 母親からの自立のための普遍的無意識の実際

母親からの自立を促す伝承物語として、グリム童話「ヘンゼルとグレーテル」を取り上げる。幼児教育分  
野におけるこれまでの実績や、登場人物や構成要素、およびその深層について考察する。

### 5.1 「ヘンゼルとグレーテル」のこれまで

幼児教育における出版の実績として『キンダーブック』に初めて扱われたのは、昭和32年(1957)度の  
第12集・第9編「せかいのおはなし」(昭和32年12月発行)である。同時に紹介されているのはアンデル  
セン童話や、他のグリム童話、日本の昔話である。次の掲載は、「1-情操キンダーブック(4-5才用)」  
の第9集・第9編「ぶれーめんの おんがくたい」(昭和47年12月発行)で、「付録1・つばめのおうち」  
の中で、小沢正文により「グリム童話とお菓子の家」で紹介されている。その後は昭和61年(1986)度「①  
情操キンダーブック(4-5才用)」の第23集・第5編「夏のおはなし特集号」(昭和61年8月発行)であり、  
このときは表紙に登場している。この号は童話の特集が生まれ、他には「さんびきのこぶた」やイソップ童  
話が掲載されている。<sup>(31)</sup>

その間、『キンダーおはなしえほん』(フレーベル館)の筆頭・第1集(1967年・昭和42年)として、藤  
城清治(構成・文)、木馬座(絵制作)で発行された。<sup>(32)</sup> その後も、グリム童話の名作中の一話として、現  
在も絵本や童話集等で発刊され続けている。<sup>(33)</sup>

与え方の実績としては、語り手の立場から幼児や児童を観察している松本なお子・藤井いづみらの論があ  
る。松本は、3歳から10歳以上までの語り聞かせの目安とするための、発達段階のリストを作成しており、  
その中で「ヘンゼルとグレーテル」を6歳から10歳に置いている。藤井いづみは、「ヘンゼルとグレーテル」  
を小学1年生には必ず与えるようにしていると述べ、既に話を知っている子どもたちであっても「話が始ま  
ると目をこらして聞き入」<sup>(34)</sup>ると述べている。以上のような研究や実績を踏まえ、5歳から6歳への読み  
聞かせとして妥当と判断している。

### 5.2 「ヘンゼルとグレーテル」における母親の二側面

Bettelheimは、「ヘンゼルとグレーテル」のはじまりの部分の特徴について次のように述べている。

子どもたちが無事に家に帰りついても、問題はなにひとつ解決しない。母親は前よりもっと意地の悪  
いやり方で、子どもたちを捨てようとする。(中略)子どもは、いつまでも母親にしがみついてさえい  
れば、問題は解決すると望み、信じている。<sup>(35)</sup>

母親の肯定的側面のみを信じて疑わないグレーテルの姿がそこにある。そして、家を放り出されたグレー  
テルは森でお菓子の家に出会う。この「お菓子の家」について、さらにBettelheimは「実際に自分の乳を



子どもに与える、母親のシンボル」<sup>(36)</sup>と論じている。

伝承物語には、象徴としての言葉が登場人物の立場等に多く用いられているが、このお菓子の家は産み育てるという母親の肯定的側面の象徴であると言える。そしてそれを食べ尽くすということは、母親に甘え全面的に頼り切ってしまうことを物語っている。

つまり、家を放り出されたことによって、産み育てるという母親の肯定的側面に全面的に頼ることはもはやできないと頭では理解していても、現実の場では甘えて頼り切ってしまうグレーテルの心を視覚的に表現しているのがお菓子の家なのである。

そして、この頼り切ってしまうところに現れるのが「魔女」である。魔女は、グレーテルを食べよう（殺そう）とする。お菓子の家が産み育てるという母親の肯定的側面の象徴であるなら、魔女はすべてを呑みこんで死に至らしめるという母親の否定的側面の象徴であると言える。そして、それは肯定的側面（＝お菓子の家）と一体的なものなのである。

「中」においては、母親の「否定的側面」を認識し、それを乗り越える行動をとらなくてはならない。「ヘンゼルとグレーテル」においては、それが魔女を騙して魔女を殺すという行動なのである。Bettelheim は次のように述べている。

自分たちの置かれた状況を知的に判断し、それに基づいて、目的にあった行動をしなければならない。それが、指のかわりに骨をさし出すことであり、魔女をだましてかまどにはいらせることである。（中略）次の段階へ進む道は、その未発達な段階の破壊的な面と、そこにとどまることの危険性に気づかぬば、ひらけない。（中略）子どもは成長にともなって、その母なるものの否定的側面を認識し、それと分離しなければならない。ここに、成長の一段階として母親殺しの主題が生じる。<sup>(37)</sup>

魔女を騙して殺す行動は、いわば母親を殺すということである。伝承物語はそれほどまで極端な描き方で母親からの自立を説いている。また、それほど極端な描き方でないと、この時期の幼児たちには理解できないということが言える。

「終わり」において、グレーテルが家に帰ると母親はもういなくなっている。「ヘンゼルとグレーテル」の原話（初版）での母親は、継母ではなく実母として描かれている。そして、グレーテルが魔女を殺して家に帰ったときにその母親は既に死んでいることになる。これは母親と魔女との同一性を示していることになる。母親がいなくなっているということは、グレーテルが母親の否定的側面を認識し、それを乗り越えたことを意味している。現に、家を出るときは兄であるヘンゼルに頼り切っていたグレーテルは、兄であるヘンゼルと対等な関係性をもつて協力している。つまり、自立した存在として描かれている。

「3. 伝承物語の範囲」で述べた構造に当てはめると、下記のようなになる。

初め－中心人物が生きる発達段階以前（今まで生きてきた段階）のイメージ

\* 母親の「否定的側面」を認識していない＝自立できない（依存） 静的な描かれ方

中－これから生きていく発達段階にふさわしい経験

\* 母親から自立するきっかけ（自立の手段） 動的な描かれ方

終わり－中心人物が生きる発達段階（これから生きていく段階）にふさわしいイメージ

\* 母親の「否定的側面」を認識して行動する＝自立できた 動的な行動による結果

幼児たちは、伝承物語で描かれる意味での母親の否定的側面を把握し、そこから脱するためにはどのようにすればよいのか見出していくことになる。普遍的無意識は、われわれの「内面」の深層であり人類に共通の普遍性がある。伝承物語には幼児たちが抱える問題の提示と、出逢うであろう危機を乗り越え自立し、その帰結としての自立する姿を、具体的な道筋を伴って提示していることが明らかである。

## 6. 読み聞かせ指導の試案

この章では、「ヘンゼルとグレーテル」の読み聞かせの試案を提示する。対象は5歳から6歳程度を想定している。

### 6.1 「ヘンゼルとグレーテル」の構造

貧乏な木こり夫婦が子捨てを断行し、二人の兄妹は魔女にとらわれ、妹は魔女が兄を食べるために働かされる。妹が知恵の機転で魔女をかまどに押し込んで殺し、二人で家に帰るという筋である。全体を七つの場面に区切り、前出「3. 伝承物語の範囲」の三部構成と対応させると下記のようなになる。

- 第1場面 子捨ての相談の立ち聞き (初め1)
- 第2場面 小石をたどり帰宅 (初め2)
- 第3場面 パンをたどれず森を徘徊 (初め3)
- 第4場面 お菓子の家の発見 (初め4)
- 第5場面 魔女に拘束される (初め5)
- 第6場面 魔女を殺す (中)
- 第7場面 二人で帰宅する (終わり)

このように、第1場面から第5場面が「初め」、第6段落が「中」、第7場面を「終わり」となる。場面で区切りながら問いかけを行い、園児たちの反応を拾い言葉かけをしながら行う読み聞かせの試案を提示する。

### 6.2 読み聞かせの試案

以下、「ヘンゼルとグレーテル」<sup>(37)</sup>の主たる場面の一部とその場面の意味、問いかけの例である。

#### ①第1場面「子捨ての相談の立ち聞き」(初め1)

飢えがひどくなったある夜、妻が木こりの夫に二人の子どもを捨てようと提案する。

「ねえ、おまえさん。明日早くふたりの子どもを連れておいき。それぞれにあと一切れずつパンをやつて、森へ連れ出すのさ、木が一番生い茂った森の真ん中へね。そして、火を起こしてやったら、そこを離れてふたりを置いてきぼりにすればいいよ。もうこれ以上ふたりを養ってやれやしないもの」親の後を追って家に戻ってこないように食事を与え、その場を離れないように火を与え、夜まで時間稼ぎをする方針であり、これから子捨てが断行されようとしている。二人はこの相談を立ち聞きする。読み聞かせの際は、はじめの状況を確認する程度でよい。

問 い かけ の 例：はじめはどんな様子ですか。

予 想 さ れ る 反 応：二人がかわいそう。こわい。置いてきぼりなんてひどい。

反 応 に 対 す る 言 葉 が け：そうだね。捨てられてしまいそうなんだね。

#### ②第2場面「小石をたどり帰宅」(初め2)

子捨ての相談を聞いて泣くグレーテルをヘンゼルは慰め、家を抜け出し白い小石を集める。翌朝、集めた小石を捨てながら森の中へ入っていく。ヘンゼルの不可解な行動を、親が見とがめる。

ヘンゼルが立ち止まって、家のほうをふり返りました。すこしするとまた立ち止まってはふり返り、立ち止まってはふり返りました。とうさんが言いました、「ヘンゼル、立ち止まって何を見ているんだい。足元をよく見て、さっさと歩くんだ」「だって、とうさん、ぼくの白い子猫を見てるんだよ。屋根の上ですわって、ぼくにさよならをしてるんだ」。すると、かあさんが言いました。「ばかだね。あれは、おまえの子猫なんかじゃないよ。朝日が煙突に照りつけているのさ」。(中略)いよいよ真っ暗な夜になると、グレーテルが泣き出しました。けれどもヘンゼルが言いました。「月が昇るまで、もうすこし待つんだ」。そして月が昇ると、ヘンゼルはグレーテルの手を取りました。小石が真新しい銀貨のように輝いて、ふたりに家への帰り道を教えてくれました。

親対子の駆け引きが緊張感をもつて描かれている。ヘンゼルは「ぼくの子猫を見てる」という幼稚な言葉で親を欺き、親の視線を逸らすために「屋根の上」と返事をし、昨夜拾っておいた小石を帰りの道しるべにするために落としながら歩く。明確な目的意識があるため、母親に見とがめられてもヘンゼルは行動を止めず、現状を克服するための行動は能動的である。一方グレーテルは、ヘンゼルについて回るだけで意思は感じられず、受け身的である。子捨ての相談を聞いて泣き、さらに夜の森で泣く様子は弱々しく、主体性は読み取れないと言える。

読み聞かせの際には二人の行動を確認するとよい。

問 い か け の 例：ヘンゼルは何をしましたか。グレーテルはどのような様子でしたか。

予 想 さ れ る 反 応：ヘンゼルは小石を拾って目印にした。ヘンゼルは頭がいい。グレーテルは泣いていた。ヘンゼルはグレーテルに優しくしてあげた。グレーテルはヘンゼルに助けられている。

反応に対する言葉がけ：捨てられそうだけれども、それでも家に帰りたいんだね。

### ③第3場面「パンをたどれず森を徘徊」（初め3）

一度目のヘンゼルの知恵は成功したが、親にとってみれば根本的な問題は未解決のままであり、再び子捨てを企てる。ヘンゼルは小石を用意することができず、パンで代用しようとする。

（ヘンゼルは）何度も立ち止まっては、いただいたパンを地面に落としました。「なんでそんなにしょっちゅう立ち止まってきょろきょろしてるんだい、ヘンゼル。さっさと歩くんのだ」と父さんが言いました。「だってぼくの鳩を見ているんだよ。屋根の上にとまって、ぼくにさよならをしてるんだ」するとかあさんが言いました、「ばかだね。あれはおまえの鳩なんかじゃないよ。朝日が煙突に照りつけているのさ」。(中略) 昼にグレーテルはパンをヘンゼルに分けてやりました。ヘンゼルは自分のパンをみんな道にまいてしまったからです。

ヘンゼルは同じような方法で子捨てを回避しようとするが、家のドアに鍵がかかっており小石の準備ができなかった。一回目の成功体験を繰り返しても同じ成果が現れなかったこの展開は、ヘンゼルの行動の限界を暗示している。グレーテルは自分のパンをヘンゼルと分けるが、与えられた食べ物を分割しても現状に変容はなく、グレーテルは依然としてヘンゼルに頼り切った状態であり能動性は読み取れない。

読み聞かせの際には、二人の行動を確認し、目印に置いた物が異なることに気づかせればよい。

問 い か け の 例：ヘンゼルは何をしましたか。グレーテルはどのような様子でしたか。

予 想 さ れ る 反 応：二人は戻れなくなった。小石じゃなくてパンだったから、パンが食べられてしまった。二人ともおなかのすいている。グレーテルは一緒に迷子になっている。

反応に対する言葉がけ：帰りたいけれど迷子になってしまったね。

### ④第4場面「お菓子の家の発見」（初め4）

森を徘徊する二人の前に「お菓子の家」が現れる。

三日目に、ふたりはまた昼ちかくまで歩いていくと、小さな家へ出ました。その家は、まるごとパンでできていて、ケーキで屋根が葺かれていました。窓は白い砂糖で作られていました。

お菓子の家は、「食べ物」のキーワードであり、「飢え（飢饉）」と対極的なものとして描かれている。飢えに苦しめられた二人には、お菓子の家は自分たちの命を救う強烈な存在感をもっている。あるいは満腹でいい気持ちになれる「甘いご馳走」のイメージと、子どもたちをくつろがせる「家庭」の二つをイメージすることもできる。家を食べる、かぶりつく、抱きつく行為はまさに、自立できずに母親にしがみついた依存の姿を表している。この場面には、母親の肯定的側面だけを信じる段階が描かれている。

読み聞かせの際には、子どもたちにお菓子の家のイメージを自由に語らせるとよい。

問 い か け の 例：お菓子の家はおいしそうですね。何でできていると思いますか。食べてみたいですか。

予想される反応：チョコ、餡、クッキー、ケーキ、菓子パン。食べてみたい。

反応に対する言葉がけ：そうだね。食べてみたいよね。

⑤第5場面「魔女に拘束される」(初め5)

二人は主である魔女に拘束され、翌日から苛酷な日々が始まる。

魔女はヘンゼルをつかむと、小さな家畜小屋へ押し込みました。ヘンゼルが目をさますと、格子にかこまれていて、まるで閉じこめられた若いめんどりのようでした。そして、ほんの二、三步しか歩くことができませんでした。一方、おばあさんはグレーテルを揺さぶると、大きな声で言いました。「起きるんだ、このぐうたら娘！水を汲んだら、台所へ行って、おいしいものを作るんだ。おまえの兄さんはあそこの家畜小屋にいるよ。まずはあの子を太らせて、太ったら喰ってやるのさ。さあ、おまえは兄さんにえさをやるんだ」。

ここからは魔女対二人の駆け引きである。魔女は男児を格子に閉じ込め、女児を家事労働に従事させる。魔女の行動は、自分の元に子どもを留め置いて自立を阻む母親の否定的側面を描いている。助け合ってきた二人はここで初めて分かれ、一人の人間として行動し判断する立場に立たされる。ヘンゼルは自分が太った事実を隠すために、目の悪い魔女に小さな骨を出し延命を試みるが、時間を引き延ばすだけで根本的な解決には至らない。一方グレーテルは行動の制約が少ないにもかかわらず、隙を見てヘンゼルと相談したり、脱出を試みたり、助けを呼びに行ったりする能動性は見られない。これは依然として母親の肯定的側面を信じている無意識そのものの姿である。

読み聞かせの際には、グレーテルの行動に着目させて自由に語らせるとよい。

問 い か け の 例：グレーテルはどうして逃げ出さなかったと思いますか。

予想される反応：森の中だから逃げてもまた迷子になってしまう。ヘンゼルを置いて逃げることはできない。魔女が怖かったから逃げられない。

反応に対する言葉がけ：そうだね。一人じゃできないよね。

⑥第6場面 魔女を殺す(中)

四週間後、魔女が明日はヘンゼルを喰うと宣言する。魔女はグレーテルも焼き殺すつもりで呼び、パンが焼き上がっているかどうか、かまどを覗くよう命令する。

ところが、神様がグレーテルにそのことを教えてくれたので、グレーテルは言いました。「どうやったらいいかわからないわ。先にやってみせてちょうだい。おばあさんがその上に乗ったら、わたしが中へ押し込んであげるから」。そこでおばあさんは板の上に乗りました。おばあさんは軽かったので、グレーテルはできるだけ奥のほうへ押し込みました。そして大急ぎでかまどの戸を閉めて、鉄のかんぬきを掛けました。すると、おばあさんは熱いかまどの中で叫び、うめき始めました。けれどもグレーテルはそこから逃げていきました。そしておばあさんは、みじめに焼け死ななければなりませんでした。

ここで魔女を殺さなければ自分が殺される、という危機的な状況で、「どうやったらいいかわからないわ。」とグレーテルは言い、魔女とグレーテルの立場が逆転する。グレーテルは魔女が死に行く姿を見ず、その場から逃げ去る。グレーテルはその発した言葉によって、一瞬で母親の否定的側面を打破したことになる。ここでグレーテルは依存的で動かない存在から、動的で冒険心のある子ども像へ変身している。ここでグレーテルが魔女を殺す姿は、成長の一段階として母親を抹殺する、つまり母親の強い影響から脱して社会的に自立する姿を描いていると言える。

読み聞かせの際には、グレーテルの鮮やかな変容に気付かせるような問いかけがあるとよい。

問 い か け の 例：グレーテルのしたことをどう思いますか。

予想される反応：グレーテルがすごい。よく思いついた。グレーテルは頭がいい。勇気がある。

反応に対する言葉がけ：そうだね。一人で怖い魔女をやっつけたよね。

⑦第7場面 二人で帰宅する（終わり）

グレーテルはヘンゼルを救い出し、魔女の家にあった宝を手に入れ家へ帰る。

二人は宝石や真珠でポケットをいっぱいにして外に出ました。それから家へ帰る道を見つけました。とうさんは、またふたりの姿を見て喜びました。子どもたちがいなくなってからというもの、とうさんには一日も楽しい日はありませんでした。これでとうさんは金持ちになりました。けれどもかあさんのほうは死んでいました。

子捨てを提案した母親は死んでいなくなっており、父親が二人の帰宅を迎えハッピーエンドとなる。二人が持ち帰った宝とは社会的財産を象徴する。つまり貧乏を脱するための価値を携えて帰宅した結末は、二人が立派に社会に通用する存在であることを表している。帰宅した家は同じでも、母親がいなくなっているという事実、そして魔女の家の宝を持ち帰ってくるというこの二つは、母親の肯定的側面を脱して否定的側面を乗り越え、家庭から社会に向けて自立した存在になった象徴とすることができる。

全部読み終わった後、自由に感想を発信させるとよい。

問 い か け の 例：お話は終わりです。お話を聞いてどうでしたか。

予 想 さ れ る 反 応：グレーテルはすごかった。二人とも家に帰れてよかった。お母さんがいなくなったね。お菓子の家がほしい。二人ともがんばった。

反応に対する言葉がけ：お母さんはいなくなったけど、グレーテルはきっと大丈夫だよ。

## 7. 終わりに

今後は実際に幼稚園・小学校で読み聞かせの実践を行い、その効果を検証していくとともに、他の伝承物語の構造分析や要素分析を行い、幼児たちに与える価値について検証を続ける。陰惨さや残酷さから敬遠されがちな伝承物語であるが、単なる表層的な印象によって保育者や教育者は伝承物語の読み聞かせを避けてはならないし、まして結末を読まずに終えたり、結末を書き換えた伝承物語を読み聞かせてしまったりしてはならないと考えている。伝承物語には幼児たちの自立心の形成を促し、物語指導の根幹を成す様相が含まれているのである。

## 引用文献・参考文献

- 1 海老沢千冬・浅田精利・小倉みどり・金子さつき・徳田克己・横山範子、「幼児の昔話に関する知識－10年前の結果と比較して」、『日本保育学会大会研究論文集』、54号、2001、pp.780-781
- 2 小山祥子「乳幼児の言葉の育ちに関する現状と課題（2）－家庭と保育の場における『おはなし』の現場から－」、『駒沢女子短期大学研究紀要』45号、2012、pp.31-38
- 3 文部科学省、『幼稚園教育要領解説』、東京、フレーベル館、2018、p.10
- 4 前掲（3）、p.167
- 5 前掲（3）、p.171
- 6 前掲（3）、p.181
- 7 前掲（3）、p.213
- 8 前掲（3）、p.223を筆者の立場から整理。
- 9 Andrew Edgar、Peter Sedgwick 編、富山太佳夫他訳『現代思想芸術辞典』、東京、青土社、2002、「物語／語り narrative」の項、p.365
- 10 石下忠・今泉淑夫他編、『日本思想史辞典』、東京、山川出版社、2009、「物語」の項、p.980
- 11 国語教育研究所編、『国語教育研究大辞典』、東京、明治図書、1991、「物語教材」の項、p.826-828

- 12 前掲 (11)、pp.826-827
- 13 浜本純逸、「他者の生を生き自己の生を探求する」、『月刊国語教育』、231号、東京、東京法令出版、2000、p.13
- 14 前掲 (3)、p.223 を筆者の立場から整理。
- 15 国語教育研究所編、『国語教育研究大辞典』、東京、明治図書、1991、「物語教材」「民話教材」「童話教材」「伝承物語」各項、pp.826-828、pp.806-807、pp.629-631、pp.611-612
- 16 市毛勝雄、『文学教材の授業改革論』、東京、明治図書、1997、p.16
- 17 市毛勝雄、『国語の教材研究入門』、東京、明治図書、1992、p.38
- 18 市毛勝雄、『文学的文章で何を教えるか』、東京、明治図書、1983、p.121-122
- 19 Max Lüthi、小澤俊夫訳『ヨーロッパの昔話－その形式と本質－』、東京、1995 第4版、岩崎美術社、pp.7-144 から筆者まとめ。(初版1969)
- 20 前掲 (19)、pp.154-155
- 21 Bruno Bettelheim、波多野完治・乾侑美子訳『昔話の魔力』、東京、評論社、1978、p.19
- 22 前掲 (21)、p.20
- 23 前掲 (21)、p.21
- 24 前掲 (21)、p.30
- 25 河合隼雄、『昔話の深層』東京、講談社、p.32
- 26 Carl Gustav Jung、林道義訳、『元型論 (増補改訂版)』、東京、紀伊國屋書店、1999、pp.46-48
- 27 前掲 (21)、p.101
- 28 前掲 (25)、p.47
- 29 前掲 (25)、p.48、p.73
- 30 前掲 (25)、p.51
- 31 北林衛編、『フレーベル館100年史』、東京、フレーベル館、2008、p.346-347、p.447、p.545
- 32 前掲 (31)、p.788
- 33 小森香折=文、吉田尚令=絵、西本鶏介=監修、『ひきだしのなかの名作7 ヘンゼルとグレーテル』、東京、フレーベル館、2017、全34ページ等
- 34 小澤俊夫、『昔話入門』、東京、ぎょうせい、1997、pp.152-153、p.178、(執筆分担者は本文参照)
- 35 前掲 (21)、p.214
- 36 前掲 (21)、p.216
- 37 前掲 (21)、p.217
- 38 吉原高志・吉原素子訳『初版グリム童話集1 (全4巻)』、東京、白水社、1997、pp.71-79

#### その他の参考文献

- 高橋健二『グリム兄弟』、東京、新潮社、1968  
高橋健二訳『グリム童話全集1 (全3巻)』、東京、小学館、1976  
佐々梨代子・野村滋訳『子どもに語るグリムの昔話3 (全6巻)』、東京、小熊社、1990-1993  
『世界文学大事典』編集委員会編、『集英社 世界文学大事典5』、東京、集英社、1997